

佐々木農場の奮戦記

佐々木 SPF 豚農場 顧問 益子正巳

I SPF 豚をはじめた動機

佐々木農場の概要 (1975 年前後当時)

佐々木家は千葉県成田市、八街市の北東に位置する富里町の農業振興地域にある。この地域は、専業率の極めて高い、しかも平坦で肥沃な農地に恵まれ、高技術水準の農業が盛んである。

佐々木家の全体の土地面積は約 3ha で、当時は野菜作等耕種農業を中心に少数の繁殖豚(種豚)を飼養する複合経営の精農家であった。家族構成は、三郎氏夫妻、長男の作三氏、長女照子さん、次男浩二氏の 5 人で、作三氏および 2 人の弟妹はまだ高校生、中学生であった。

第 6 回全日本肉豚共進会で大活躍

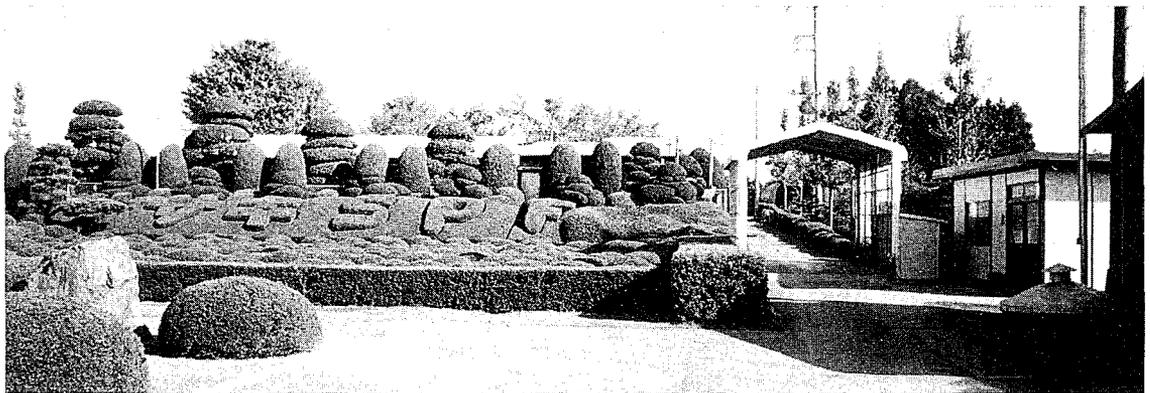
佐々木氏が SPF 養豚経営に取り組むことになったのは、この共進会に佐々木氏が生産した肉豚を出品したことがそもそもきっかけとなったのである。それではここで、共進会に挑戦し努力し

た模様を紹介してみよう。

1970 年 10 月 23 ~ 26 日にかけて、東京都立川市にある立川食肉株式会社を会場として盛大に行われた。

出品は同腹の雌、去勢各 1 頭を 1 組として純粋種および雑種であった。全体の頭数は 107 組、214 頭で、千葉県からは純粋種 2 組(佐々木氏はこの組に入っていた)雑種 1 組の出品であった。共進会出品にあたって県予選が行われ、最後に出品者 3 名(3 組)が代表に選ばれた。予選に出品する豚は同腹のもの 3 頭で、うち 1 頭は最終予選時試験的に処分して、枝肉の状態、カット肉の品質等を審査して優劣判定の参考とした。

それまで佐々木氏の出品豚は補欠にランクされていたが、屠体成績がよかったことで出品豚に選出された。全豚共に出るからには何がなんでも勝たねばならない。佐々木氏の意気込みは大変なも



佐々木 SPF 豚農場

のである。県および県養豚団体職員で構成される指導部員とタイアップしてその都度ミーティングを行い、飼養管理方法を決めた。他の出品者はどちらかという指導部員に耳を傾けるが、マイペースでのぞんでいた。

まず指導部員によって1週間ごとに体長、胸囲、管囲を測り、養豚試験場から体重測定秤を運んで体重を測定した。また、背脂肪の蓄積状態(厚さ)を生豚の皮膚の上から触診して推定した。今日のようなスキニングスコープがなかったので、専ら背線に沿って人差指と中指で強く押しながら移動して厚さを感知した。指導部員はよく馴れているので実際の値とほぼ一致している。そしてさらに1週間後の増体重を想定して飼料の給与量(制限給餌)を決める。これらの記帳は全て佐々木氏夫人が担当した。

肉豚とはいえ、肢蹄の強化を図るため追い運動を1日朝夕2回、1回あたり30～40分行った。佐々木氏はなるべく人目につかないよう、こっそりと竹の鞭を用いて追い運動を課した。あんなことをして佐々木さんは頭がおかしくなったのかと近所の人に思われるのが厭なためである。追い運動は馴れるまでは大変で、豚は右往左往し、追う人が疲れてしまう。しかし数回繰り返すうちに豚は落ち着くようになり、人の思うままに歩行し、よく馴れるものである。

それに体型もよく見せなければならない。つまり、共進会の審査は日本種登録協会の定めた肉豚審査標準により行われる。生体審査と屠体審査があって、前者は40%の得点率で後者の屠体審査は60%の得点率となっている。よって、生体の審査では優れた肉豚らしい体型を見せなければ優位にならない。

審査標準で肥育終了時体重は当時概ね90kgとしており、現在の流通体重よりも小体重であった。佐々木氏は綿密な計画の元に、雌、去勢とも90kgの同体重として出品したことはいうまでもない。やがて審査も白熱化して、佐々木氏の豚は次第に競り勝ってAクラスは無論のこと相当上位に選抜されてきた。第1の関門である生体審査成績は良いと判断された。これに比較して他の同僚2人はAクラスとBクラスの境にあって苦戦している。その後いよいよ屠体審査に入るのだから、これは中身を開けてみないと判断できない。

一同、上位入賞を祈念して翌日行われる屠体審査を待って一旦帰宅した。翌日、枝肉、カット肉の審査が行われた。上位グループのランクされているようだ。最良目でなくても枝肉の状態で優勝圏内に入ると確信できる。

最後の決め手はカット肉、中でもロース(胸最長筋)の太さである。これには自信があった。前記したように県予選で同腹豚を若い段階だったが屠体審査しており、好成績を得ているため間違いないはずである。後はフケ肉でなく、保水性が悪くなければ安心してよいと思った。結果は予測したとおりで、優等賞に入賞した。他の方々は残念ながら入賞できず、純粋種の部類は1等賞、雑種の部類は銀賞(1等賞相当)にとどまった。

思うに、この方々のうちのお1人は自信過剰であって慢心が災いしてこの結果となったのであろう。佐々木氏があれほどよくミーティング通り実行していたことが良い結果として現れたのであり、県指導部員と信頼関係を深めたことが契機となつて、養豚事業に彼は多大な成果をあげたと言えるだろう。

佐々木氏は早速この快挙を自宅に電話した。ご

夫人との労が報われ、ご一家は大変感激され喜ばれた。

その後、SPF豚飼養を開始してからも県共進会に肉豚を出品して、全体の最高位である名誉賞を獲得したことがある。とかくSPF豚は成長が速いことから体脂肪が多くなり肉質がよくないとの評判であったが、これを覆している。全豚共の優勝豚はコンベンショナルであるが、県共ではSPF豚であったことに価値があるといえる。要するにSPFでも改良された素質のよい豚であれば、コンベンショナル豚をむしろ凌ぐ利点を持てるのが解る。佐々木氏は殊の外ご満悦であった。

このようなことから、千葉県では系統造成とSPF化とを結びつけた事業の展開を図っている。したがって、SPF豚に対する誤った評価が払拭されているのも事実である。

一方、1967年(昭和42年)千葉県養豚試験場はSPF豚に関する試験研究を開始した。そしてSPF豚の飼育管理に関する試験研究および生産施設の整備を図った。翌68年暮れには宮原強研究員執刀のもとに、第1回の子宮切断術を行った。これより先、当時の宮原研究員は農水省家畜衛生試験場の柴田部長、波岡研究室長のもとで研修を受けて技術を習得していた。

当時のSPF豚に対する一般の認識は、実験動物として利用する目的で生産するものとしていた。ところが、コンベンショナルの養豚で慢性伝染病に悩む階層が一部にあって、清浄化したい意向を持ったことと、さらに注目されたのが「成長が速く飼料効率の良い」という得難い特長を持っているので、これを生かそうと畜産目的に利用することが考えられたのは周知のことである。

千葉県では県下に普及するため、モデル養豚場の設置について1971年度(昭和46年度)に事業化した。具体的には施設費に対し、異例の50%という高率の助成が計画された。通常ならば30%の補助である。そこで、モデル養豚場にふさわしい養豚家を選ばねばならない。しかも近隣が養豚家である団地化された豚の主産地域では、SPF豚の経営に衛生上問題があるとされる。またその他の地域を選定するにしても、敷地周辺は50メートル以内にコンベンショナルの養豚場があつてはならないことが条件とされ、経営および技術の優れた養豚家を選ばねばならない。種々検討がなされた結果、佐々木氏に白羽の矢があてられた。その根拠となるのは、1) 周辺50メートル以内に養豚場がない。2) 技能・技術が優れ、清潔で飼養管理がよい。3) 研究期間を信頼し、新しい技術の分析と導入をよくはかる。4) 全日本肉豚共進会に対処しての真摯な姿勢、等々であった。中でも決め手となったのは4で、必ず成功するものと誰もが信じた。早速県の担当が富里村および農協、佐々木氏を交え、この事業を受けるかどうかで議論された。佐々木氏の経営を大きく転換し、SPF養豚の専業経営になるのであるから、安易には受けられない。親族会議を開いた。わが国では農家段階で初めての未知の分野であり、不安である。国とか県のモルモットにされる恐れがある等の意見が出され、大方は反対であった。それから、佐々木氏は機会があつて養豚団地である香取郡干潟町という所に赴いた折り、2、3人に意見を求めたところ、やはり反対された。断った方がよいか受けるべきか迷った。しかし、まもなく農業高校を卒業する後継者で長男の作三氏には相談していなかったので、意見を求めた。返事は明快であった。是

非ともこの事業をやりたいという意思表示がされ、春秋に富んだ青年作三氏の希望により新たな養豚経営の方向が決められたのである。

II 佐々木 SPF 豚農場発足

佐々木氏の承諾によって、昭和46年度千葉県SPFモデル養豚場設置事業により、中核農場（原種豚農場）の機能を併せ持たせて、実用化の第一号として農場が建設開始された。県の示した当時の事業規模は、中核種豚場の基準の場合、種雄豚4頭以上、種雌豚50頭以上、育成豚と肥育豚は150頭以上としたので、SPF佐々木農場はこの規模で発足した。ここから種豚の供給を受ける自立経営農家は、繁殖雄豚3頭以上、同雌豚40頭以上、育成と肥育豚を200頭以上と決めている。佐々木氏はこれまで飼養していた種豚等を手放して、施設建設のため準備に入った。

1972年（昭和47年）2月佐々木SPFモデル養豚場が竣工した。今までの養豚施設と異なり、出入り口扉、最新の消毒設備、シャワーおよび浴槽、くん蒸室などが設置された。佐々木氏はこのような養豚施設建設と同時に、周辺には木を植えた。真夏の日陰樹が豚に涼をもたらし、また落葉樹であるため、冬は日の射し込む温暖な舎内環境としている。だから真夏の暑熱の時期でも熱射病にかかったことがない。厳冬でも晴天の日は太陽がいっぱいさし込む。また、樹木の緑葉は養豚場の臭気を幾分なりとも吸収する作用があると言われている。当時は植木ブームでもあったので、苗木を植える等、養豚と植木作を結びつけた経営となった。さらに豚舎敷地前の広場には一面サツキが植えられ、花の時期は誠に見事で、庭園の中に豚舎があり種豚の群が見えるといったところであ

る。

佐々木氏は清潔にした養豚を心がけ、豚は汚いというイメージを少しでも払拭することをモットーに活躍している。とにかくSPF状態維持のためには、すべてが可能な限り清潔でなければならない。毎日シャワーを浴び、衣服交換をすること等、この事業に入る前は考えられないことであった。これを体験して佐々木氏は「SPF養豚は芸者養豚である」と言った。深い意味があるのかと思い質したところ、「芸者は風呂に入ってから仕事に出かける。SPF養豚も同じである」と聞き、一笑したものだ。

やがて受け入れ体制も整い、試験場から供給されるプライマリーを待つまでになった。そして同年3月、第1回目の導入があった。品種はランドレースで、当然のことながら、生産されてから今日まで舎飼いである。

III 韓国の済州島（チェジュ島）で養豚技術を伝授

1973年（昭和48年）のある日、突然佐々木氏を訪ねた男性がいた。佐々木氏は一面識もない。当の男性は人品骨柄卑しくない、ハンサムで40代後半の年齢に見えた。

本人が切り出した挨拶は、現在東京に在住しており、名前は木村正雄、職業はプラスチック工業関係で、大栄プラスチック工業株式会社の社長であり、不動産業もやっているとのことであった。また韓国の済州島が生地であること、日本に帰化していることを述べた。済州島には農場を持っており、兄がいるので共同で蜜柑の栽培をやっている。日本から苗を導入してさらに日本の技術者の同行をお願いし技術指導も受けている。蜜柑に関しては、静岡県の実験研究機関や蜜柑生産農家に



濟州島の大栄農場

依存し、技術指導を受けて情報の収集も行い自己の経営の一助としているという。そこでどうしても堆肥がほしいため養豚を始めたが、やってみるとむずかしい。蜜柑生産経営と平行して養豚経営も本格的に実施したい。それには技術の習得を要し、品種の改良もやらねばならないということで助力願いたく訪ねたとのことであった。

佐々木氏はだいたいの理由がわかってきた。そこで、自分をあえて訪ねなくとも県の研究機関があるので、そこに依頼したほうがよいのではないかと答えたら、いや、付近の人たちは佐々木農場であっても十分役に立つと言われたので、お願いしたいということであった。(後日の話では、誰にも聞かずに佐々木農場の看板を見て直ちに訪ねたそうである。)

木村氏の話はなお続く。とにかく一度濟州島に来てほしい。これに要する費用は一切負担するからということであった。佐々木氏は見ず知らずの人の突然の韓国訪問要請に応諾するわけにもいかず、即答を避けて別れた。慎重を期して、東京にいる佐々木氏の妹さん夫婦と相談した。興信所に調査依頼してはどうかと佐々木氏は切り出したが、後でわかったとき木村さんは心象を害するのでは

ないかとお夫婦からは反対された。佐々木氏は迷ったが、ついに断わることにした。

その後、2、3回木村氏から回答の問い合わせがあったが、言を左右にしていた。するとある日、木村氏は奥さんを同行してきた。奥さんと会って言葉を交わすうちに不安が一掃され、佐々木氏は要請に応じることとした。しかしあまり気が進まないでこう答えれば相手が諦めるかと思い、忙しい自分の代わりに長男の作三(当時20歳)ではと話したところ、予測に反し快諾された。そして早々に作三氏は濟州島に向かうこととなる。現地は数ヘクタールの蜜柑畑と粗末な豚舎があり、一見して改良の遅れた交雑種が50～60頭ほど飼われていた。作三氏は数日間滞在し、指導に専念した。この農場は濟州島の南端、西帰浦(すきば)という所にあり、海岸線に近く気候温暖で緑豊かな地にある。近くには、かつて李承晩大統領の別荘であった所がある。(現在はホテルとなっている。)

帰国した作三氏は、飼養管理はよく豚舎の清掃も行き届いているし繁殖成績もよいが、豚の資質はよくないので改善する必要があることを伝えてきた、と報告した。

その後木村氏が佐々木氏宅へ来て種豚の譲渡を依頼したので検討したが、あいにく適当なものがなく、セカンダリーの雄豚しかなかったので、コンベンショナルの雌豚5頭を探し求め、前記の雄豚と共に無償で供与した。

やがて1年ほど経過したころ木村氏がやってきた。用件は人工受精技術の指導依頼であった。できるだけ早い機会にと言うので理由を聞いたところ、去年譲り受けた雄豚が大変大きくなり、交配すると未經産豚はつぶれてしまうので、人工授精

が必要になったというわけであった。早速、器具類を準備した。ただし現地で用意しなければならない擬牝台がある。至急作らねばならないので佐々木農場にある台を測定し、大栄農場へ持ち帰った。佐々木氏は旅券等の取得を待って急遽木村氏と同行した。

羽田空港から釜山（プサン）経由で済州空港に着陸した。済州島は韓国南部、朝鮮半島南西の小島で、面積180平方キロ、登山、狩猟、海釣り、海水浴等の行楽地となっている。近い将来は、一大観光地として開発計画がなされている。大栄農場に着いて翌日、いよいよ擬牝台に乗って交尾動作をさせて精液を採取するのであるが、豚個体によっては擬牝台を見向きもしない。そうなるとう厄介であり、時間をかけて訓練しなければならない。一回で台に乗るよう佐々木氏は期待した。農場の豚舎の配置を見ると、雌豚舎と雄豚舎とは距離がある。近年では雌豚舎内の一角に雄が囲われているのとは違う。離れていることが雌に接近することによって一層情欲をそそるのである。これを考えると条件はよい。佐々木氏は台を雌豚舎内に置き、麻袋を台に巻いて雌の尿をかけた。そして竹の鞭を持って雄豚を誘導した。雌豚舎内の通路をゆっくり歩かせて、雌豚を檻の外から眺めると、口角泡を飛ばし次第に興奮してくる。「今少し冷やかすか」と佐々木氏はつぶやいた。年配の殿方はご存じでしょうが、終戦直後、赤線区域と称していた場所で、軒を連ねた中に女性がたたずんでいる。その通路を歩き声を掛け合ううち次第に興奮してくる。そういった一連のことを「冷やかす」と言っていたのである。

当の雄豚は機が熟している。ようやく擬牝台に近づけたところ、その周囲を回りながら麻袋に大

きな鼻をつけ臭いをかいだ。やがて勢いよく乗駕して交尾姿勢をとったので佐々木氏は手際よく精液を採取した。見学していた一同、さすがベテランの佐々木さんと拍手を送った。

IV 軌道にのった佐々木農場

千葉県で佐々木氏のSPF豚モデル農場を種豚の供給基地として展開をはかるため原種豚場と位置付け、SPF豚中核農場と称するようにした。

1972年（昭和47年）以降中核農場が合計5戸造成された。当時の基準となる規模は種雄豚4頭以上、種雌豚50頭以上、育成豚と肥育豚は150頭以上としたことは前述した。そして中核農場から供給を受ける一貫経営農場に相当するグループを自立経営農家と呼称した。この規模は繁殖豚雄3頭以上、雌40頭以上、育成豚と肥育豚200頭以上としており、15戸になっている。

佐々木農場が軌道にのるまでに苦労したことは、試験場からのプライマリーの供給が計画通りにならなかったことである。また、純粋のランドレースであり、豚の素質もさることながら舎飼いで過ごしたこともあって、肢蹄や腰の弱いものが多かったことである。

もう一点は飼料のことである。当時SPF豚専用の飼料は、マッシュでありエチレンオキサイドガスで滅菌消毒したもので、まだまだ需要は多くなかった。二重包装の袋詰めになっていて、たまたま値上がりに対処して買い集めたので、置き場所に困ったりした。これもやがてペレットに代わり飼料タンクを設置するようになって解決した。

種豚の供給は順調になり、購買者も増えると同時に調査や視察に訪れる人も多くなった。中でも1975年（昭和50年）2月には安倍晋太郎農林大



安倍晋太郎農林大臣ご視察

臣が来場し視察された。前年あたりからオイルショックで飼料費の高騰があり、畜産危機と言われ、国では畜産国会が開かれるので予め勉強しておくための視察であった。また、1978年(昭和53年)にはなんと北朝鮮から国の研究員がSPF種豚の譲渡を依頼するため来場した。佐々木氏は承諾し翌年輸出した(後の消息は不明)。その他、学者、国・県の研究員、そして多くの養豚家および研修生等、訪れる人は後を絶たない。氏のどんな時でも笑顔を絶やすことなく、心から歓迎する姿勢には感心させられる。常に現状に満足することなく、何事も真摯に取り組んでいる。

そんなことから、1987年(昭和62年)、永年にわたり養豚特にSPF養豚の振興に尽力した功績

が認められ、黄綬褒章を受賞されている。

波岡先生が、佐々木農場10周年記念の時の祝辞に、中国研修生・陽修岐氏は日本から学び得た最高の知識は佐々木農場からであったこと、そして資本主義下における自由競争の原則が初めて理解できた、と述べられている。

近年の佐々木農場では、県経済連、地元農協とタイアップして、消費者団体、県内の生活協同組合員数十人を招待して農場を案内し、その後SPF豚肉の試食会を毎年行っている。現場をよく理解され好評を博していることは言うまでもない。

佐々木農場も発足以来27年になる。十年一昔といふから、三昔になろうとしている。その間逐次規模拡大が図られ、現在は種雄豚45頭、種雌豚300頭、育成豚150頭、子豚および肥育豚は2,000～2,500頭となっている。品種はL.W.Dで、飼養管理は佐々木氏夫妻、作三氏、浩二氏、多忙時は浩二夫人が応援するなどそれぞれが従事している。有限会社として全員が入るほか、2児の母である照子さんも経営に参加している。

また、佐々木氏は養豚を通じて知的障害者の養護にも関与しており、1969年(昭和44年)より現在に至るまで、障害児教育振興のため他に率先し、養護学校および福祉施設終了者の就労受け入れに尽力している。佐々木養豚場においても、障害者5名の職親として動物管理の補助作業員にあてて勤務させている。生活指導にあっても規則正しく服装は清潔にするようにさせ、家族同様に待遇しており、老後の生活についても配慮している。休日には全員を連れて散髪に行き、帰りに料理屋の酒席に案内する習慣になっている。時々酒席に行きたいあまり、彼らは理髪店に行きたいと催促したりする。また彼らの希望もあって、豚舎に演

歌を流すようにもした。

以上の経過から佐々木 SPF 豚農場の、多年にわたり活躍して得られた賞歴を紹介する。

1976年 第5回日本農業賞 日本放送協会
千葉県農業奨励賞 千葉県

1983年 第22回農林水産祭参加
(社) 富民協会主催
第32回全国農業コンクール 名誉賞

1992年 千葉県農業賞 千葉県

その他、共進会における入賞については前記した通りである。

これまで佐々木 SPF 豚農場の概要を述べた。蛇足が多く、反面十分意を尽くせない憾みがあって、深く反省している。



稲毛生活協同組合員との交流会